京都歴史災害研究　第19号（2018）13～24

論　文

室戸台風による京都市とその周辺の学校被害と記念碑

植村　善博*

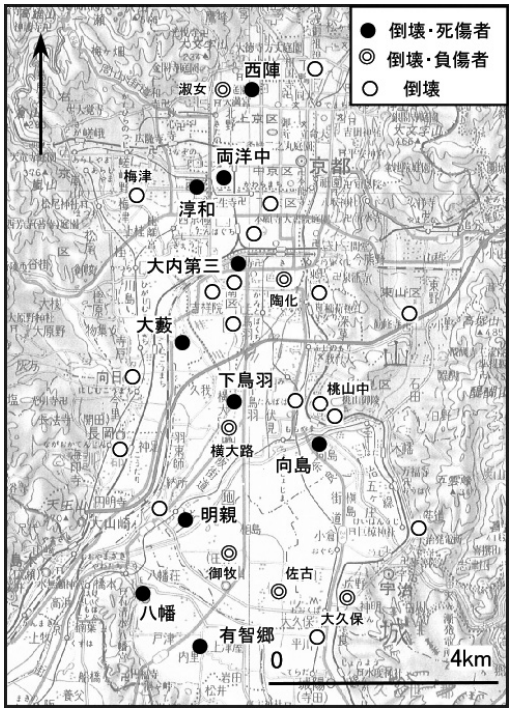
Ⅰ．はじめに

昭和9年9月21日午前6時頃室戸岬から大阪湾に入って北上した室戸台風は午前7時から9時の間に大阪市や京都市の上空を通過した。本台風は最低気圧911 hpa、瞬間最大風速60 m/秒を記録した最大級のもので、大阪や京都では猛烈な暴風により建物の倒壊や多数の犠牲者が発生した。とくに、小学校を中心に多くの校舎が倒壊し児童や教員が死亡、負傷した。本災による学校での被害の深刻さは社会に大きな衝撃を与え、以後の学校建築は鉄筋コンクリート造が主流となった。また、この災害や犠牲者を記念、慰霊するため多数の記念碑（記念や慰霊のための碑や塔を記念碑と総称する）が建立された。80年以上が経過した今日でも記念碑が室戸台風や防災行事のシンボルとして教育現場で重要な役割を果たしている。

京都付近の被害について『京都市風害誌』[1]や『甲戌暴風雨災害誌』[2]に総合的な報告があり、学校建築の被害について和田[3]や十河[4]による記載がある。被災した学校の状況と殉職教員の事績については京都府[5]、文部省[6]、田淵[7]などに詳しい。近年では植村[8]が被害と記念碑、谷端[9]は社寺の被害状況、川島[10]は小学校の復興建築について報告している。しかし、学校における被災実態や記念碑の建立とその経過について分析した報告はない。

本稿では京都市内の西陣小学校と淳和（現西院）小学校、桃山中学校（現桃山高校）、綴喜郡（現八幡市）八幡小学校の事例（第1図）を検討し、校舎の倒壊と犠牲者の発生およびその要因、慰霊行事の実施と記念碑の建立経過を明らかにする。さらに、記念碑の今日的意義について考察したい。

＊ 立命館大学歴史都市防災研究所客員研究員



第1図　京都市とその周辺における校舎倒壊
（京都市[1]および京都府[2]による）

Ⅱ．被害の概要

京都市では午前8時15分より45分の間平均風速30.5 m/秒、最大風速42 m/秒を記録した[11]。このため住宅や工場、学校校舎や社寺など建築物に深刻な被害が生じた。山林における倒木や荒廃も著しく、翌10年6月の大雨洪水時に多量の出水や流木を発生させ被害拡大の要因となる[12]。本風災による京都府下の死者245名中児童・教員が170名に達し、全体の69%と高い割合を占めている。10名以上の被災者が発生した学校を第1表に示す[13]。西陣小学校の死者41名、淳和小学校の死者32名、八幡小学校の死者33名が突出している。一方、校舎の倒壊にもかかわらず被災者を一人も出さなかった桃山中学校や梅津小学校などの例もあり注目される[14]。

21日朝の状況を下京区大内小学校の日誌[15]からみてみよう。「9月21日金曜日。早朝より雨をまじえる風が強い。午前7時頃より児童は風雨の中続々と登校して教室で待機している。7時15分頃より次第に風は強さを

第1表　京都市とその周辺の学校における10名以上の人的被害（京都府[13]による）

学校名	死者		重傷者		軽傷者		
	教員	児童	教員	児童	教員	児童	計
両　洋　中	0	19	0	8	0	22	49
西　陣　小	0	41	1	34	7	233	316
淳　和　小	1	31	3	57	0	42	134
大内第三小	0	5	1	8	0	64	78
下鳥羽小	0	18	1	19	0	37	75
向　島　小	2	13	0	14	0	56	85
大　藪　小	0	5	0	5	0	53	63
八　幡　小	2	32	3	29	3	53	122
有　智　小	0	1	0	4	0	18	23
明　親　小	0	1	1	0	0	22	24
計	5	166	10	178	10	600	968

増してきた。校長が担任教員に各教室へ入り児童の監督、保護にあたるよう、後の処置は追って通知するとの命令を下した。8時20分頃より風はいよいよ激烈となり、南、東、西側の塀は全て倒れて飛散し北校舎は危険状態になっている…」。京都市付近のほとんどの学校で同じような状況であっただろう。校舎倒壊は8時30分前後に発生したものが多い。学校における被災状況をみると、その明暗を分けたのは校長らの避難決断の時期および伝達方法であったと推定される。以下、具体的に学校事例を検討していく。

Ⅲ．学校被害の実態

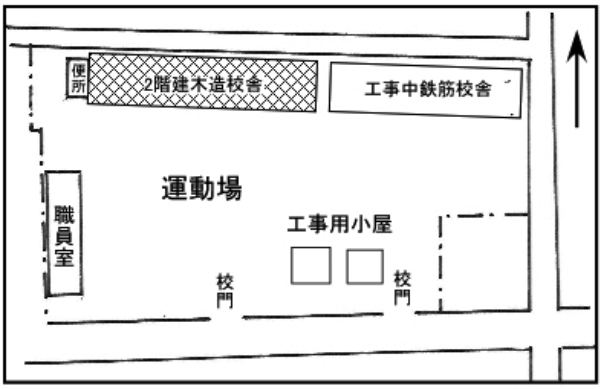
1．京都市立西陣小学校

(1) 学校史[16]

明治2年12月上京5番組小学校として開校、明治17年1月校名を西陣校、明治20年7月には西陣尋常小学校に改称した。明治41年12月に校舎増改築の4カ年計画をたて、明治44年12月に教室1棟、雨天体操場、事務室などを竣工させた。大正14年に学区民による校地校舎拡築期成会が結成され、隣接地の買収などをおこない、昭和9年3月にはコンクリート校舎の起工式を実施、台風襲来時にはほぼ完成していた。なお、本校は平成7年3月末に桃薗校との統合により閉校、平成9年4月には西陣中央小学校に再統合されている（住所　京都市上京区上立売通大宮東入幸在町689）。

(2) 被災状況

台風時の校舎配置を第2図に示す。運動場に面する明治41年築の木造2階建8教室が倒壊した。一方、その

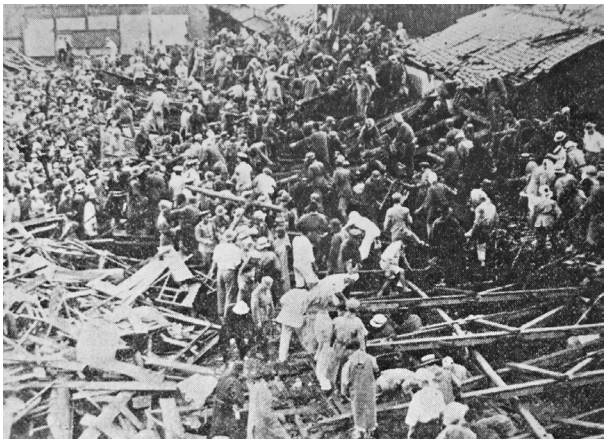


第2図　西陣小学校の倒壊校舎と配置図（和田[3]に加筆、編集）

東側には3階建コンクリート校舎が完成間近であった。職員室は敷地西端の仮建物に入っていた。西陣校の体験者からの聞き取り作文[17]によると、「教室に入って外をみると工事小屋のトタン屋根が紙切れみたいにひらひら飛んでいった。先生が教室へ入ってこられ、新校舎へ避難することになった。その準備をしている最中、ガラガラと聞いたことのない大きな音をたてて目の前の壁が大きくゆがみ2階建の校舎が一瞬にたおれてしまった」。1、2階合わせて8教室約500名が下敷きになり、1階の1年と3年計41名が死亡、教員1名と児童46名が重傷を負った（第3図）。完成間近な新校舎に児童を避難させようとの教員からの意見があったが、校長の決断が遅れて惨事をまねいたとの説もある。地元の住民や消防組、青年団、在郷軍人会などがかけつけ雨中素手で救助活動をおこなった。また、学区では直ちに復興互助会を組織し学校の復旧や復興に地域ぐるみで尽力している。

(3) 慰霊行事

惨事の翌22日に犠牲児童41名の学校葬が講堂で執行された。また、9月25日から妙蓮寺本堂と方丈を借用



第3図　西陣小学校の倒壊状況（京都市[1]）

第4図　妙蓮寺の西陣校罹災児童慰霊塔（2017年5月撮影）

第5図　西陣小学校の風害記念碑（2017年5月撮影）

して授業を再開する。10月1日に倒壊校舎東隣のコンクリート新校舎が完成し授業実施のための準備作業を始めた。村田確郎校長は同日付で退職（昭和8年4月に着任）、代わって西村元佑が新校長として着任した。10月12日岡崎公園にて京都市主催の合同慰霊祭、10月25日には京都府主催の慰霊祭が植物園昭和会館にて執行されている。同年12月21日妙蓮寺墓地に「西陣校罹災児童慰霊塔」が建立された（第4図）。災後90日目の建碑は京都で最も早い例となる。本塔と慰霊は同寺の本光院が管理、執行しており、同寺本堂および本光院には罹災児童の位牌が置かれている。1年後の昭和10年9月21日、「風害記念碑」が校舎北側に建てられ除幕式を挙行した（第5図）。その後、妙蓮寺にて1周忌の追悼法要を営んでいる。また、同日雨天の中、京都府・京都市主催の甲戌災害1周年慰霊祭は昭和会館で催され、1時半から神式、3時から仏式で執行された。昭和12年4月9日には復興校舎が竣工し落成式を挙行、記念パンフレットも

第6図　倒壊した西陣小学校の屋根瓦（2017年5月撮影）

発行された。戦後の昭和42年7月に校舎西側にプールが完成。昭和50年9月10日には樋之口町公園愛護会の宇田彦治がプール横の花壇に倒壊校舎の屋根瓦を室戸台風被災のモニュメント（第6図）として保存したという[18]。

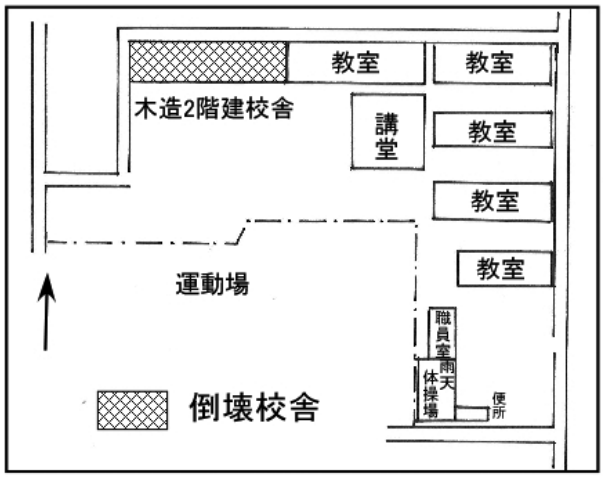
2. 京都市立淳和小学校

(1) 学校史[19]

明治6年2月葛野郡西院村に西院校が創立、明治37年4月西院尋常小学校と改称した。昭和7年7月に「わが学校は淳和天皇の離宮の跡地にあり、同天皇の遺徳を讃え奉戴することが使命である」との理由から校名が淳和小学校に変更された。その2年後に室戸台風に遭遇する。淳和小学校は昭和7年から14年間使われ、昭和22年4月には西院小学校に改められ、今日に至っている。（住所　京都市右京区西院春日町3-1）

(2) 被災状況

台風時の校舎配置を第7図に示す。昭和に入ってから

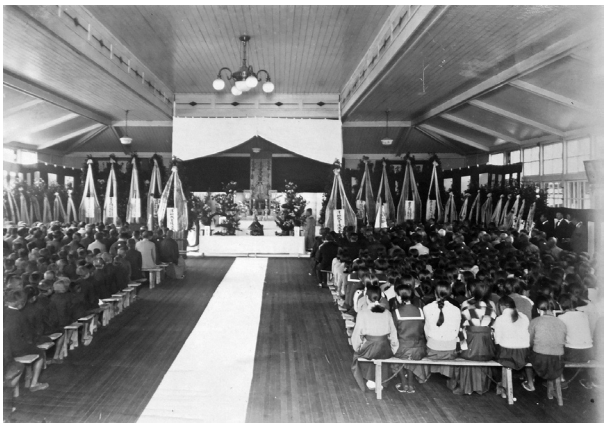


第7図　淳和小学校の倒壊校舎と配置図（和田[3]に加筆、編集）

第 8 図　淳和小学校コンクリート壁の倒壊（京都市[1]）

生徒数は増加を続け、昭和 2 年に 2 階建 8 教室を増築、昭和 6 年には 4 教室と講堂の増設がおこなわれた。昭和 7 年には 36 学級、児童約 1,800 名、教員 40 名の大規模学校で、午前と午後の 2 部授業をおこなっていた。9 月 21 日午前 8 時半頃、運動場に面して建つ昭和 2 年建築の東西に長い木造 2 階建校舎西半分 8 教室が倒壊した。体験者らの作文[20] によると、「南側の春日神社の樹木が強い風で倒れだした。南側のガラス窓が吹き飛び教室内に破片が飛び散った。このため、先生の指示で教室の北側や廊下に移動。この間、教員が大声で直ちに講堂へ避難するよう指示してまわられている。校舎が揺れ始めたが、1 階の児童らは 2 階から降りてくる 3 年生の避難が終わるまで教師を取り巻いて廊下や階段付近に待機していた。3 年生が避難を終えた直後に木造校舎はごう音とともに倒壊した」。コンクリート製の防火壁を境に 8 教室が倒壊、1 年 4 学級の約 200 余名が下敷きになってしまった。防火壁が階段や「に」組教室側に崩落したため（第 8 図）、1 年生 31 名が犠牲になった。「に」組担任の松浦壽恵子訓導は 1 人の女児を抱きかかえたまま絶命。

第 9 図　淳和小学校グラウンドの学校葬（西院小学校蔵）



第 10 図　淳和小学校講堂の慰霊祭祭壇（西院小学校蔵）

第 11 図　高山寺の風災慰霊塔（2017 年 5 月撮影）

女児は無傷で無事だった。直ちに、学区民や軍隊 68 名らによる救出活動が素手により行われた。重傷者は 90 名、軽傷者 42 名に達し、重傷者は大宮病院（13 名）、市民病院（6 名）、日赤病院（5 名）などへ運ばれ治療を受けた。数ヶ月から半年間もの入院を余儀なくされた児童もいる。

（3）慰霊行事

9 月 26 日殉職教員 1 名と遭難児童 32 名の学校葬が厳粛に執行された。校庭にテントをはって大きな仏式祭壇

第 12 図　西院小学校校庭の風災記念碑（2017 年 5 月撮影）

を作り、慰問視察の後藤内務大臣らも参加している（第9図）。講堂に祭壇を設置し関係者や在校生らが参加して仏・神の両式の慰霊祭を実施した（第10図）。昭和10年9月21日の一周忌には西院学区有志が高山寺に「風災慰霊塔」を建立した（第11図）。当日午前9時半から山田校長や遺族関係者らが列席して除幕式と追悼法要を執行した。昭和11年11月には復興新校舎が竣工した。昭和25年9月21日には風災13周忌の追悼式を講堂にて神・仏両式で執行した。昭和38年9月21日には高山寺にて遭難学童殉難教員の慰霊法要をおこなったが、以後校長や学校関係者が毎年法要に参加するようになる。昭和41年9月21日には殉職殉難児童の33回忌追悼法要が高山寺にて行われた。当校では校庭に風災記念碑（第12図）が立っており、昭和52年4月から毎年9月21日を学校風災記念日と定め、防災行事をおこなっている。

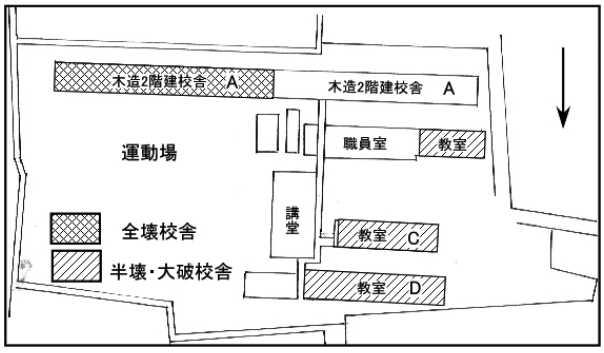
3. 京都府綴喜郡八幡小学校

(1) 学校史[21]

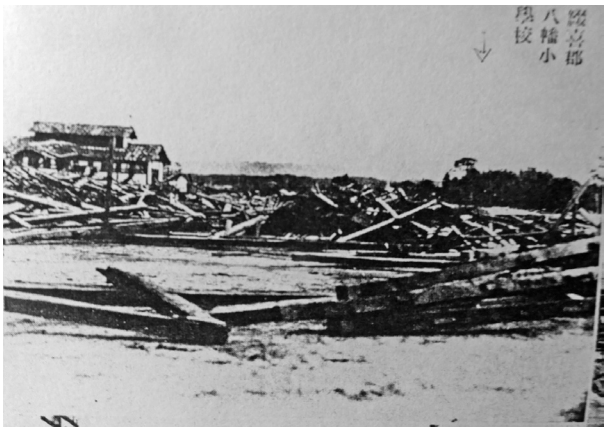
明治6年4月1日八幡町科手に知周校として開校、明治20年6月に八幡尋常小学校と改称する。大正3年12月に小学校と役場がともに八幡の現在地に移転した。昭和7年11月に大阪市桃薗小学校の2階建校舎1棟を移築（第13図のC）、次いで昭和9年6月には京都市東山区安井小学校の校舎2棟（第13図のAおよびD）を移築した。その直後に本台風に遭遇した。（住所　八幡市八幡菖蒲池12）

(2) 被災状況

昭和9年に高等科4学級、尋常科24学級、生徒数約1,300名、教職員29名という大規模校であった。当時の校舎配置を第13図に示す。東西に長く4棟の校舎が並んでいたが、1階に15教室が入る大きな2階建校舎



第13図　八幡小学校の倒壊・大破校舎と配置図
（十河[4]に加筆、編集）



第14図　八幡小学校の倒壊（京都府[2]）

（A）と北端の2階建校舎（D）は昭和9年6月に京都市安井小学校の旧校舎を購入、移築竣工したばかりであった。記録類によると[22]、「阪根治三郎校長は綾部市出身で単身赴任中、学校近くの住居から風雨の中7時20分に登校した。始業は8時30分であるが、多くの教員が早くから職員室に待機していた。校長は強風となり担任は各教室に出て適切な処置をとるよう命じた。教室では窓ガラスが割れて反対側に机を移動させ、登校してきた生徒は廊下に出した。南端の2階建30教室を有する長大な校舎は暴風に直撃される位置にあって危険がせまった。校長は危険を察知し早急に児童を避難せるべきだと決断、職員室には他にだれもいないため自ら教室を回って担任と児童に至急講堂に退避するよう命じていった」。このような避難途中に大音響とともにA校舎が倒壊した（第14図）。A校舎1階に2年4教室と4年3教室、2階に6年4教室と4年1教室が入っており、階下で避難最中の2・4年生が下敷きになった。地域住民や軍隊による救出活動がおこなわれたが、32名の児童と阪根校長が即死、重傷者32名（教員3名を含む）軽傷者56名（教員3名を含む）の被災者を出す大惨事になった。重傷を負い入院中の櫻井利次訓導は死亡、その娘も学校で亡くなっている。

(3) 慰霊行事

昭和9年9月21日19時より阪根校長の通夜は念仏寺で、死亡児童は各家庭において実施された。9月23日10時から破損した同校講堂で犠牲者の町葬が執行され、府知事、遺族や児童代表らが参列している。初7日にあたる9月27日には教員と児童代表が犠牲者の墓参をおこなった。また、1周忌の昭和10年9月21日に八幡町が善法律寺に慰霊塔を建立（第15図）、以後は毎年同日に八幡校教職員や児童らが慰霊塔付近の清掃や供養を実

第 15 図　善法律寺の慰霊塔（2017 年 7 月撮影）

施するようになる。昭和 11 年に復興平屋木造建 28 教室が竣工した。昭和 58 年 9 月 21 日の 50 回忌は被災時の四年生だった 10 名が発起人となって善法律寺で法要を実施、阪根校長の令息や当時の教員、遺族らも参列した[22]。

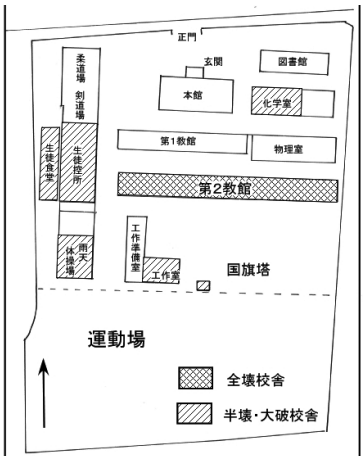
4. 京都府立桃山中学校

(1) 学校史[23]

大正 10 年 4 月 11 日京都府立桃山中学校として紀伊郡堀内村の京都女子師範学校内に開学、同年 10 月 23 日堀内村毛利長門町（現在地）の新校舎へ移転した。昭和 6 年 4 月 1 日堀内村をはじめ伏見市、深草町他 6 村が京都市に編入され、伏見区となる。昭和 8 年木造 2 階建の第 2 教館が完成。昭和 23 年 3 月桃山中学校は廃止され、同年 4 月 1 日から京都府立桃山高等学校と改称する。また、同年 10 月 31 日に府立桃山女子高校（旧桃山高等女学校）および京都市立伏見女子高等学校（旧伏見女学校）は桃山高校に統合され新制京都府立桃山高等学校となる。（住所　京都市伏見区桃山毛利長門東町 8）

(2) 被災状況

当日は風雨とも強かったが、教職員や生徒らは早くから登校してきた。午前 8 時頃運動場を横断中の田中校長（右足は義足）は暴風により吹き倒され工作室に収容された。校長の報告などによると「定刻の 8 時 10 分に平常通り授業を開始した。風雨は激しさを増し南面する第 2 教館の窓ガラスが壊れて飛散、瓦が飛び校舎が動揺しだした。このため危険を感じて令を発し、第 2 教館 10 組の生徒約 500 人を安全と思われる第 1 教館の廊下および物理・化学両教室に避難させた（第 16 図）。また、校内の火を消させた。この最中に昭和 6 年創立 10 周年記念として建てられ東洋一と賞された国旗塔の鉄柱が折れた。第 1 教館も危険になったため約 430 名の生徒を本館へ移動させた。しかし、本館も安全ではないと判断、生徒約 930 名に校外へ出て校門前の畠地へ退避するよう命じた。生徒らは風雨のなか、混乱も少なく迅速に移動、畑や崖下に避難を終えたという。工作室の 51 名にも運動場に避難するよう命じた。この最中の 8 時 27 分、大音響とともに第 2 教館が倒壊した（第 17 図）。しかし、教職員と生徒に一人の死傷者もださず無事避難ができた」という[24]。結局、第 2 教館が全壊、国旗塔の鉄柱が中折、生徒控所や食堂、雨天体操場などが半壊・大破した。その後 9 時 30 分に生徒を校門前に集合させて全員の無事を確認、校長は秩序ある避難行動により一人の死傷者もなかったことを喜ぶと生徒らの行動を賞賛して 10 時に解散下校させている[25]。9 月 25 日から講堂や残存教室を利用して授業を開始、同年 12 月に応急バラッ



第 16 図　桃山中学校の倒壊・大破校舎と配置図
（桃山中学校金城会[22] より編集）

第 17 図　倒壊した桃山中学校第 2 教館（桃山高等学校蔵）

ク教室2棟の新設と残存校舎の復旧補強工事がおこなわれた[26]。

(3) 復興と建碑

田中校長らの迅速な決断と教職員の機敏な避難誘導、生徒らの冷静な行動により2階建18教室の第2教館などが倒壊、大破したが一人の負傷者も出さなかった。これは本校の快挙として注目され、賞賛されることになる。天皇は久松侍従を訪問させて賞辞を下賜、文部大臣らも視察訪問した。新聞にも取り上げられ全員避難・無事の快挙は全国的に注目され教職員や生徒、同窓生らの誇りとなる。その後、第2教館の鉄筋コンクリート復興への嘆願書が同校父兄会（9月29日付）および金城同窓会（10月3日付）により京都府に提出された[27]。これをうけ、府は鉄筋コンクリート耐震耐火構造の3階建校舎を建設、昭和11年11月1日には落成および創立15周年の祝賀会を催している（第18図）[28]。また、同日に風災記念碑の除幕式も挙行、石碑は父兄らの醵金の一部を利用し新設なった第2教館の南側に建てられた。一方、国旗塔（高さ31.5 m）も昭和11年8月27日に再建、記念碑も製作された。現在、平成7年に改修された校庭西端の「同窓の庭」に「風災記念碑」は移され、「桃陵文庫碑」（昭和5年1月建立）とともに並んで置かれている（第19図）。また、文庫碑の碑台裏側には国旗塔復興記念の石板碑が貼り付けられている。本庭の3碑は全て田中常憲校長よる撰文が刻まれている。

第18図　復興した新第2教館と国旗塔（桃山高等学校蔵）

第19図　風災記念碑（左）および桃陵文庫碑（右）
（2017年7月撮影）

Ⅳ．考察

1．学校における被害の要因

(1) 校舎倒壊

9月21日の午前8時30分を中心に京都では最大風速42 m/秒の猛烈な暴風が生じた。この時間帯は児童らが校舎内で待機中または授業開始直後にあたる。運動場に接して南面し東西に長く配置された木造校舎が南からの暴風により倒壊または大破したものが圧倒的に多い。市内小学校で13校15棟が倒壊、犠牲者発生の主要因となる。13校のうち11校が新市域に属していた[29]。川島によると、15棟は全て木造、建築年代は明治30～40年代2件、大正期7件、昭和期6件と築後20年以内のものが約9割弱を占めるという[30]。これは建築年代より木造建築の耐風性に対する弱さが強く現れた結果である。とくに、校舎建築は採光優先のガラス窓の多用、教室空間の優先による壁や柱の少なさなどにより著しく弱い構造をもつ[31]。

一方、十河[32]は郡部の倒壊木造校舎11件について築年代は明治40年代3件、大正期4件、昭和の4件と市内のものに比べて相対的に古いことを報告している。とくに、八幡小学校では昭和9年移築の安井尋常小学校の再利用校舎が倒壊した。大藪小学校の倒壊校舎は昭和3年に移築した柳池小学校、明親小学校では大正元年移築の伏見第2小学校の古校舎を再利用したものである。さらに、犠牲者のなかった学校でも再利用の古校舎が全壊、大破した例として青谷小学校（大正5年移築、出水小学校）、三山木小学校（大正10年移築、嘉楽小学校）、御牧小学校（昭和8年移築、桃園小学校）、久津川小学校（昭和8年移築、桃園小学校）が指摘できる[33]。当時は昭和恐慌下、郡部町村の財政状況はきわめて厳しく、安価な市内の古校舎を購入して移築再利用することが普通に行われていた。再建に際して資材の改善や構造補強を行っておらず、古く脆弱な校舎が再利用されたことに問題がある。また、大正期以降に京都市へ編入された新市域の学校でも旧郡時代の再利用移築校舎に被害が集中しており[34]、上の指摘と同じ背景をもつといえる。

(2) 大阪市の被害との比較

冨士岡[35]によると大阪市では小学校244校中、全壊5

件、一部倒壊 40 件であった。京都市の全壊 13 件、一部倒壊・大破は 35 件に達した。被災率は前者の 18% に対して後者は 37% で、京都市は約 2 倍も高い。最大風速は大阪の 60 m/ 秒に対して京都 42 m/ 秒であったにもかかわらず、大阪市で倒壊の少なかった理由は何であろうか。冨士岡[36] は昭和 2 年以降、学区制を廃した大阪市は学校建築を統括し、震災予防調査会が関東大震災の経験から立案した耐震構造を採用した規格を作成、木造であっても耐風性に優れた校舎になっていたと指摘する。一方、京都市では学校建築は地区の財源によって実施する学区制が昭和16年3月末まで採用されていたのである。すなわち、経済的余裕のある富裕学区では鉄筋コンクリート校舎が建築されたが、周辺学区などでは木造校舎が圧倒的に多かった[37]。校舎建設に関する両市の行政施策のちがいが大阪市より京都市に深刻な校舎倒壊を生じた原因であるといえる。

(3) 人的被害

京都府下における教員・児童の死者 170 名、負傷者 820 名は衝撃的な数値である。この直接的原因は木造校舎の倒壊による圧死だった。1 教室に約 50 人の児童を収容した過密状態、2 階建 1 階が講堂で 2 階に教室を置くもの、横に 10 教室以上を配置した長い構造の校舎などが犠牲者多発の背景にある。また、1 階教室に 1、2 年生を入れることが多いため、犠牲者が低学年児童に集中している。

つぎに、校長らの非常時における避難指示の決断時期や伝達方法は大切な問題である。当日の状況として、多くの学校で教員は 7 時頃に登校したが、通学できない教員もいた。児童も風雨の中ずぶ濡れになりながら登校、教室内外で待機していた。7 時半頃から風が強さを増してきたため危険を察知した校長らは担任に教室で生徒を掌握、保護すること、指示は後で知らせる旨を命令している。教室では強風により南側の窓が壊れてガラス片が散乱、児童を北側や廊下へ移動させたケースが多い。8 時頃までに危険を察知し児童を安全な建物へ避難させる決定を下した学校では、避難終了後に建物が倒壊している。一方、避難指示が8時20分頃以後と遅れた学校（西陣校、淳和校、向島校）や指示がなかった学校（大内第三校、下鳥羽校、大藪校、有智郷校）では避難中または教室や廊下で待機中に校舎が倒壊し犠牲者が生じた。一方、避難させた建物も危険になったと判断し、安全と思われる校外へ避難を命じた梅津・横大路両小学校や桃山中学校の対応は機敏で優れた処置として評価される。

(4) 校舎の復興

京都市では本風災後 43 校で復旧工事を実施した。京都市は復興校舎について、鉄筋コンクリートにすることを原則とし、昭和 9、10 年年度に施行する方針をたてた。建設財源は学区経済に属するため、低利資金として総額 693 万 2,100 円を国から借り入れ（償還は 5 年据え置き、15 年返済）、残りは地域の持出し金により建設せざるをえなくなった[38]。市内の 68 学区から復興申請があり、昭和 11 年に 42 校、昭和 12 年に 33 校で新築校舎が竣工した。しかし、財政状況から 11 年分の 33% にあたる 14 校でコンクリート製にできず木造校舎が建てられた。市内の倒壊校で昭和 11 年度内に工事が完了、昭和 12 年 4 月から新校舎で授業が開始されたところが多く、校舎復興は順調に進んだといえよう。

2. 慰霊行事と建碑の状況

(1) 慰霊行事の特徴

犠牲者の生じた小学校でどのように慰霊行事がおこなわれたかを検討してみよう[39]。西陣校では翌 22 日に殉難児童の学校葬が行われ、41 の棺が並べられた。淳和校では 26 日に学校葬を挙行、グラウンドにテントをたて祭壇を設置、教員と児童の戒名を記した位牌を並べ仏式による追悼がおこなわれた。下鳥羽校では 27 日に殉難児童の学区葬、向島校は23日に殉職訓導2名の学区葬、29 日に遭難児童・教員の合同葬を執行した。八幡小学校では 23 日に遭難児童の町葬[40]、大藪小学校は 22 日正午から児童 5 つの棺を迎えて学校葬をおこなった[41]。告別式を学校で実施したのは西陣と大藪の 2 校である。10 月 3 日には京都市の小学校長会および教員会主催の児童教員慰霊追悼会が営まれた。知恩院、西本願寺など各宗派も独自に慰霊祭を実施している。また、京都市は 10 月 12 日岡崎公園で神式による風害遭難者の、京都府は 57 日にあたる 10 月 25 日昭和会館で府下風水害遭難者 245 名の慰霊祭を神仏両式で挙行した。ついで、1 年後には犠牲者を出した学校で 1 周忌の慰霊祭が、また昭和 10 年 9 月 21 日に京都府・京都市主催の 1 周年慰霊祭が昭和会館で執行された。

(2) 慰問と救護

災後には中央政府関係者らが東京から視察や慰問に現地を訪れている。天皇差遣わしの久松定孝侍従は 9 月 24 日午前に京都府庁で「罹災者及遺族ノ苦痛ヲ憶ヒ救

第20図　淳和小学校慰問視察中の賀陽宮夫妻と後藤内務大臣（左から2人目）（西院小学校蔵）

護並ニ復旧ノ事ニ専心努力スルヨウ」との聖旨を伝達、その後桃山中学校を嚆矢として被害の激甚だった八幡校、西陣校、淳和校などを慰問している。次いで、9月26日賀陽宮夫妻および後藤内務大臣（第20図）、10月1日町田商工大臣、10月2日松田文部大臣らが続々視察している[42]。9月29日には天皇家から救恤金44万円が被災府県に下賜され、京都府には2.5万円の配分があった。30日には各宮王公家より840円の下賜があり、11月12日に府庁で天皇や宮家、満州皇帝などの救恤金の伝達式をおこなった。府は10月12日に各区町村長に罹災者調査を通知し、罹災者からの申告にもとづき死者に15円余、重傷者7円余、住宅全壊には6円などが分配されたのである。

(3) 殉職教員の顕彰

本台風時、児童の避難誘導などに従事して殉職した教員は京都府で4名、大阪府で18名、他県3名の計25名に達した。彼らは一身を犠牲にして児童を救わんと命を賭して職責に殉じた聖職者の模範として大いに顕彰されることになる。京都府は10月16日に『嗚呼殉職四訓導』[43]を発行、模範とすべく府下の小中学校へ送付している。12月21日には殉職教員の遺族が文部省に召集され盛大な表彰式を挙行、顕彰碑や賞金を受けた。とくに、5児童を抱いて殉死したとされる大阪府豊能郡豊津小学校の吉岡藤子訓導への賞賛宣伝が活発におこなわれ[44]、出身県の山口市には殉職像も建立されている[45]。さらに、昭和11年10月30日には大阪城公園大手前広場に教育塔が竣工した[46]。教育塔は教育盡忠・教育報国の大精神を発揚させるため本風災をはじめ明治以来の殉職教員の英霊と学校での死亡児童らを顕彰する目的で建設されたものである。当初は大阪教育会が本風水害の記念碑を建設する計画として提議したものだったが、途中から帝国教育会が中心となって事業を全国的規模に拡大させ、殉職教員顕彰の国家的シンボルとしての壮大な建築物となった。前述の京都府の殉職教員や遭難児童らも英霊として祭られている。なお、京都市における殉職教員とその顕彰については別稿において論じる予定である。

(4) 記念碑の特徴

犠牲になった教員や児童を慰霊し、風災を伝承するために記念碑が建立された。京都市とその周辺で確認できたものは10碑あり、その特徴を第2表に要約する。当時の京都市内で8件、郡部では久世村大藪小学校と八幡町八幡小学校の2件である。最も早い建立は3カ月後妙

第2表　室戸台風関係の記念碑

	碑の名称	所在位置	関係学校名	建立年月日	碑表面の記述	碑裏面の内容	建立者
1	慰霊塔	妙蓮寺墓地	西陣小学校	昭和9年12月21日	西陣校犠牲児童41名の氏名	風害の実況、福原日事撰	西陣学区
2	風災記念碑	桃山高校	桃山中学校	昭和10年1月中旬	昭和9年9月21日　風災記念碑（知事斉藤宗宣筆）	罹災記念碑銘　被災及び建碑の経過、田中常憲撰	桃山中学関係者
3	記念碑	旧西陣小学校	西陣小学校	昭和10年9月21日	記念碑	なし	西陣学区
4	風災慰霊塔	高山寺	淳和小学校	昭和10年9月21日	風害の実況（郁芳随園書）	殉難訓導松浦壽恵子および殉難児童32名の氏名	西院学区有志者
5	風災殉難碑	下鳥羽小学校	下鳥羽小学校	昭和10年9月21日	風災殉難碑、（伯爵清浦金吾書）	昭和10年9月建之、殉難児童芳名を別の板碑に記す	下鳥羽学区
6	慰霊塔	善法律寺	八幡小学校	昭和10年9月21日	校長阪根治三郎、訓導櫻井利次、殉難児童32名の氏名	風害の実況、昭和10年9月21日　八幡町長河原崎文二	八幡町
7	風災記念碑	向島小学校	向島小学校	昭和10年9月21日起工	風災記念、（荒木実）	殉職平井ノブ・中埜テル両訓導、遭難児童14名の氏名、昭和33年9月21日再刻	向島学区
8	国旗塔碑	桃山高校	桃山中学校	昭和11年8月	国旗塔復興の経過	不明	桃山中学関係者
9	慰霊塔	大藪小学校	大藪小学校	昭和32年9月	大藪校罹災児童の氏名	近畿台風大藪校にて圧死、発起人村長馬杉末吉他	久世村
10	風災記念碑	西院小学校	淳和小学校	不明	殉職訓導松浦壽恵子先生、殉難児童32名	昭和9年9月21日明、室戸崎台風、校舎為倒壊	西院学区？

蓮寺墓地に立てられた西陣校の慰霊塔である。ついで、西陣校、高山寺、下鳥羽校、八幡校の4件は1周忌にあたる昭和10年9月21日に建立され、追悼式と除幕式を合わせて挙行した。向島校では同日に起工している。これらから、1周忌に建立する指示や了解があったと思われる。以上の碑には西陣校を除き犠牲者の氏名が刻まれており、慰霊碑であることが明瞭である。1校で2碑を持つものは西陣校と淳和校で、校庭に記念碑、慰霊塔が近所の寺に設置されている点で共通する。また、多くの碑は校庭に置かれているが、西陣および大藪両校を除き原位置から移動させられた経歴をもつ。校門や中心部付近にあった碑が新築や増築などに伴って周縁部に移された。なお、碑の形態は学校ごとに異なっている。しかし、西陣校と向島校の記念碑は同一規格で製作されており、標準的な碑形態が提示されていた可能性がある。1人の犠牲者も出さなかった桃山中学の2碑はそれを誇る特異なもので、風災記念碑は早くも4ヵ月後、国旗塔復興碑は約2年後に建立されている。

(5) 碑と防災行事

本台風に関わる記念碑は1高校と6小学校に存在する。現在、碑との関連で行事を実施しているのは桃山高校と大藪校を除く5小学校である。このうち、西陣・西院・八幡の3校では9月21日に校長や児童、地域関係者が慰霊碑の清掃や献花、法要などを続けている。また、西院校では21日を風災記念日に指定している。また、この日を中心に学校行事として全校的な防災教育の取り組みを実施しているのは西院、下鳥羽、八幡の3校である。この背景には記念碑が校内が近くに存在していることが大きく影響しているといえる。

V. 結論

1. 昭和9年9月21日の室戸台風による京都市とその周辺の学校被害とその要因を明らかにした。学校校舎の倒壊は耐風性の低い木造校舎、構造的に弱い2階建建築に原因が求められる。また、郡部では京都市内の学校から古い校舎を購入して移築、再利用したものが多数倒壊した。当時の町村の乏しい財政状況が反映した結果である。
2. 建物倒壊は午前8時30分を中心に発生した。校長らが校舎の危険をいち早く察知し、速やかに安全な場所への避難を決断伝達した学校では被災者は少ない。一方、避難の決断や伝達が遅れたり指示がなかった学校では避難最中または避難待機中に倒壊して多数の犠牲者を出している。
3. 大阪市の小学校倒壊率は京都市に比べて半分程度と低い。これは大阪市が耐震構造校舎を統一的に建築したのに対して、京都市では学区制により校舎建築の質が学区の経済力に左右されていたことに原因がある。京都市では復興建築として鉄筋コンクリート校舎をめざした。しかし、経済的余裕のない学区および郡部では復興校舎の多くが講堂など避難所を除いて木造となった。
4. 1週間以内に学校葬や学区葬が執行された。風災記念碑や慰霊塔などが1周忌に建立され、被災校では犠牲者の追悼式がおこなわれた。殉職教員は教育使命に殉じた聖職者として顕彰、宣伝された。室戸台風による殉職者は盡忠報国の教育精神を表徴する模範者として犠牲児童生徒らとともにその英霊が大阪城公園の教育塔に祭られた。一方、学区民らが建立した記念碑が校庭などに設置されている学校では今日でも風災記念や防災行事が実施されており、碑の教育的価値は高い。

謝辞

本研究を進めるにあたり、以下の皆様から親切なご協力とご教示をいただきました。西院小学校長國重初美、西陣中央小学校長川村美津子、元西陣小学校閉校施設長古川正雄、下鳥羽小学校教頭井上奈美、向島小学校長松岡直子、八幡小学校長渡邊眞弓、桃山高校長畑利忠および村山保教諭、妙蓮寺本光院、西院高山寺、八幡市善法律寺、西陣学区古武博司・文字英夫・八木正紀、立命館大学谷端郷、吹田市博物館長中牧弘允および学芸員五月女賢司、山口県文書館吉田真夫。また、複数の査読者による指摘は本稿の改善に有意義であった。銘記し深く感謝申し上げます。

注

1）京都市『京都市風害誌』、1935、198+35頁。
2）京都府『甲戌暴風水害誌』、1935、194頁。
3）和田甲一「京都市に於ける風害一般状況報告」、建築雑誌48-592、1934、1446～1468頁。
4）十河安雄「京都府下小学校々舎の被害報告」、建築雑誌48-592、1934、1469～1473頁。
5）京都府『嗚呼殉職四訓導』、1934、12頁。
6）文部省『昭和九年九月関西地方風水害に於ける善行美蹟』、1935、188頁。

7）田淵巌『日本殉職教育者全傳上巻』、大日本美談社、1936、286 頁。
8）植村善博　昭和 9 年 9 月室戸台風、『京都の治水と昭和大水害』、文理閣、2011、118 ～ 126 頁。
9）谷端郷　「昭和戦前期の京都市における風水害に伴う被災社寺の分布とその特徴－ 1934 年室戸台風による風害と 1935 年京都大水害の事例－」、京都歴史災害研究 14、2013、41 ～ 51 頁。
10）川島智生「大正・昭和戦前期の京都市における鉄筋コンクリート造小学校建築の成立とその特徴について－大正 12 年から昭和 9 年までの期間－」、日本建築学会計画系論文集 508、1998、209 ～ 216 頁、川島智生『近代京都における小学校建築－1869 ～ 1941－』ミネルヴァ書房、2015、350 頁 +20。
11）3）に同じ。
12）8）に同じ。
13）京都府庁文書「学校関係死傷者調　昭和九年九月風水害一件　秘書課」昭和 9-158。
14）『甲戌暴風水害誌』によると、京都市立梅津小学校、同上鳥羽小学校、同横大路小学校などの例が知られている。
15）大内校開校百年史編集委員会編『大内校開校百年史』、1971、60 頁。
16）京都市立西陣小学校『九十周年沿革のしおり』1959、沢田芳三編『西陣校百年史』1969、40 頁、宮本九二蔵他編『西陣小学校学譜－百二十五年の歩み－』、1995、142 頁。
17）京都市小学校道徳研究会編「明かりが見えた」（京都をおそった室戸台風）、『夢いっぱい』、京都市道徳教育指導資料集、2011、47 ～ 50 頁。
18）聞き取り調査は西陣学区の住民 4 名（70 ～ 82 才）の男性から平成 28 年 5 月 31 日に実施した。
19）西院小学校創立 100 周年記念事業委員会編『西院校百年誌』1973、38 頁、小澤嘉三編『西院の歴史』1983、345 頁、西院昭和風土記刊行会編『西院昭和風土記』1990、340 頁。
20）谷口宗「風災！！室戸台風の想い出」、『西院校百年史』1973、33 ～ 35 頁、野々村和子・岩田堪治「室戸台風の体験」『西院昭和風土記』1990、127 ～ 142 頁、谷口泰一「1 年ホ組の室戸台風」『西院昭和風土記』1990、143 ～ 149 頁。
21）中田寛次編『八幡町誌』1937、234 頁、八幡市誌編纂委員協議会編『八幡市誌　第三巻』1984、507 頁、颱風編集委員会編『嗚呼悲惨室戸颱風』1998、63 頁。
22）八幡小学校「昭和九年九月風災関係書類綴」1934、颱風編集委員会編『嗚呼悲惨室戸颱風』1998、63 頁。
23）桃山高等学校・同 PTA・桃山同窓会『車石－桃山高等学校廿年誌』1969、32 頁、桃山高等学校 50 周年記念誌編集委員会『京都府立桃山高等学校創立 50 周年記念誌－車石－』1998。
24）京都府立桃山中学校金城会「桃山（風害記念号）28」、1934、110 頁。
25）京都府庁文書「昭和九年風水害一件庶務課」昭和 9-159。
26）京都府庁文書　「昭和十年度仝十一年度一部繰越桃山中学校教室改築綴土木部監理課」 昭和 10-137。
27）25）に同じ。
28）26）に同じ。
29）京都市市政史編さん委員会編「第 1 次大戦後の教育と観光」、『京都市政史第 1 巻　市政の形成』、2009、523 ～ 541 頁。
30）10）に同じ。
31）上村武男『災害が学校を襲うとき－ある室戸台風の記録』、創元社、2011、159 頁。
32）4）に同じ。
33）4）に同じ。
34）10）および 29）に同じ。
35）冨士岡重一「大阪市木造小学校の被害状況と大阪市木造小学校標準矩畫」、建築と社会、17-11、1934、81 ～ 92 頁、但し、大阪市『大阪市風水害誌』、1935 の数値とは異なる。
36）35）に同じ。
37）10）に同じ。
38）京都市復興対策、『京都市風害誌』、1935、175 ～ 198 頁。
39）1）および 2）に同じ。
40）21）に同じ。
41）京都府庁文書「昭和九年九月風水害一件　秘書課」昭和 9-158。
42）2）に同じ。
43）5）に同じ。
44）大阪府学務課編『大風水害殉職教員美談』、1934、174 頁、田淵巌『日本殉職教育者全傳上巻』、1936、大日本美談社、286 頁、吉岡訓導の新劇や浪曲への脚色と上演、浪曲のレコード化などがある（五月女賢司氏による資料）。
45）山口県教育会編『山口県教育史』、1986、445 ～ 447 頁。
46）帝国教育会編『教育塔誌』、1937、441 頁、大阪市教育会編『教育塔』1937、163+ Ⅲ頁。

Abstract

Damage of school caused by 1934 Muroto Typhoon and its related memorials in and around Kyoto city.

UEMURA Yoshihiro

1934 Muroto Typhoon is one of the biggest one attacked Japanese Island and caused severe damage of school building and human beings. This paper is aimed at discussing on the actual condition and cause of human and architectural damage of school, and the role of its related memorials in and around Kyoto city.

Collapses of wooden school buildings caused the death of many students and teachers because of its structural weakness. In tight self-governing and districts, many reused and rebuilt school buildings easily collapsed and led to many casualties.

But, rapid decision and appropriate conveyance of evacuation for student to safe place led no or slight damage. After this disaster, ferroconcrete building was adopted as standard of school buildings. Within one year of this disaster, many memorials for the dead were built in the school and near temple. These memorials have been made contribution for disaster education of school and district effectively.

Keywords: 1934 Muroto Typhoon, damage of school, memorials, Kyoto city